

海運九条の会ニュース

発行：海運九条の会事務局

和光市本町31-4-102

048-465-5505

iuehara@pep.ne.jp

改憲勢力の 核抑止論

「日本は・・・核兵器の材料になり得るプルトニウムの利用が認められている。こうした現状が、外交的には、潜在的な核抑止力として機能していることも事実だ」(読売社説9.7)「原発を維持するということは、核兵器を作ろうと思えば一定期間のうちに作れるという「核の潜在的抑止力」になっている・・・原発をなくすということはその潜在的抑止力をも放棄することになる」(石破茂・前自民党政調会長・『サピオ』10.5)。原発ゼロの国民的合意のみが、このような抑止力論を終わりにできるのではないのでしょうか。

日本原水爆被害者団体協議会は3・11後の今夏、全原発を順に廃炉にするよう求める明確な「脱原発」方針を決めた。56年の結成以来、「原子力の平和利用」の論理から原発ゼロ社会を求めてはこなかった組織の大きな転換だった。8.6付朝日社説は、「核との共存ではなく、決別への一步を先頭を切って踏み出すことが、ヒバクの体験を重ねた日本の針路だと考える」と結んでいる。

原発推進体制と 改憲方針は保守合同の 下で作られた

1954年4月3日、日本初の原子力予算が成立。同月23日には、日本学術会議が原

子力の「自主、民主、公開」の3原則を決議したが、翌年、保守合同によって自民党が結党されるもとの、アメリカ主導、大企業中心の原子力開発の体制が作られた。

現在でも原発で利益を分け合う「原発利益共同体」(原子力村のペンタゴンとも呼ばれる)は続いている。メンバーは財界や政界、官僚、御用学者、一部マスコミ。電力会社11社の原発関係支出は年間2兆円超。原子炉メーカー(三菱重工、東芝、日立など)、鉄鋼(新日鉄など)、ゼネコン(鹿島、大成、清水、大林など)、商社(三菱、丸紅など)などへ1兆6千億円、マスコミへの広告宣伝費、御用学者への寄付講座。経産省から電力会社への天下りは50年間で68人。「日本原子力産業協会」を通じて7億円超の政治献金(2009年)。原発立地自治体に国から交付される電源3法交付金や「電気事業連合会」からの寄付金。これら原発マネーの大半は、「総括原価方式」で電気料金に上乗せされている。

海運九条の会事務局も今年度から事務局員を増員して、事務局会議を重ね、野口邦和先生の講演会開催となった。

当日は、40名弱の参加を得て、会場での書籍販売は、4種類16冊。「原発からの撤退を求める署名」は郵送分も合わせて70筆弱に達し、講演後の質疑応答も活発に行われた。ついで、横須賀が原子力空母ジョージワシントンの母港となっており、三浦半島の活断層上の原子炉の危険性を喚起している呉東正彦弁護士から、現状説明と「原子力空母航行等禁止請求訴訟」請願署名の協力要請を受け、賛同の拍手で講演会は閉会した。

福島原発事故と海洋の放射能汚染

海運九条の会講演会



講演から

①原爆の核分裂連鎖反応は100万分の1秒以下という一瞬であり、ウラン238、850gが放射性物質を放出した。原子炉では、長期間にわたって核分裂連鎖反応を起こすので、出力100万kw級で一日3.5kgが放射性物質を放出する。放射性物質は、半減期の10倍ほどの時間(放射性ヨウ素131は80日程度)で一定量に達し、それ以上増えないが、セシ

ウム137などの半減期の長い放射性物質は、運転時間と共にどんどん蓄積される。(福島第一原発事故では、この一部が大気に放出された。)

②3.11の地震発生後の、原子炉の外部電源喪失、非常用電源喪失、全電源喪失につらなる時間的経過を見れば、事故原因を津波によるものとする東電の説明は当たらない。

③放射性ヨウ素131(半減期8日)はすでに、人体に影響をあたえる濃度は無くなっている。但し、被曝の問題は依然として残る。

④「セシウム137の半減期は30年」という連想から、30年たたなければ福島に戻れないと絶望的になる必要は無い。なぜならば、大地の放射線量は、セシウム134とセシウム

137の二つの同位体に起因しており、セシウム134の半減期はおおよそ2年であることと大地の放射線量の73%をセシウム134が占めることから、二つの同位体に起因する大地の全放射線量は、1年後には79%、2年後63%、3年後52%、4年後44%、5年後38%に減る。さらに10年後には24%と四分の一以下にまで減る。ならばここ5~6年間、外部線量と内部線量を可能な限り低くする(除染する)よう努力しようではないか。未来は必ず開けるはずだ。

参加者の感想から

改めて感じた核の危険性

10月2日、海運9条の会主催の講演会に参加しました。参加者の中には顔見知りの人もいましたが、大方は始めての人で、私も含めて高齢者が多いと感じました。

講演内容は、福島原発事故による放射能汚染関係と、横須賀米軍基地の原子力艦船に対する市民運動の身近な2つでした。

①気懸かりな妊婦・幼児への汚染の影響

これらについては、私の自宅が放射能ホットスポットと報道されている柏市にあること、娘一家が横須賀から至近距離の鎌倉に住んでいることから気懸かりでした。特に放射能汚染は、妊娠している娘と2歳の孫娘への影響が心配でした。

講演を聞いて、放射能汚染については出来るだけ情報を集めて、用心深く対処しなければならぬと思ひ直しました。しかし米軍基地については、一地方自治体の問題ではなく国政の段階で解決すべき課題だと強く思いました。

②反核・平和・脱原発を投票基準に

原発事故から7ヶ月余り経ち、脱原発政策を求め声を上げる人々のことが少しはメディアで報道されますが、原発推進派の巻き返しも強くなっていると感じられます。

私も微力であるけど、機会あるごとに声を上げることと、これからの選挙では候補者選択基準の一つに反

核・平和・脱原発を必ず加えようと決めました。

(海員OB 弓削政男)



風が吹く

講演会場に風が吹く。世の中で大事なものはいのちという風だ。放射能は見えない、臭わないから怖さも真綿で出来た吸血鬼のようだ。野口先生の輪郭のはっきりした声がマイクにのり会場に流れる。講演会参加を、所属する団体の人に話したら「代表で参加するつもりで聞いてきて。報告を通信に載せる」と言われた。又、他団体の近所の人にも「食事会の時に報告して欲しい」と言われた。

広島放射能は戦争中であり、アメリカ人が日本人にまいたものだ。福島は、平和な時に日本人が日本人にまいたものだ。しかも「過ちは繰り返しません」と原爆碑に書いてあるのに。三たび過ちを犯した。

私は日本に誇りをもっている。それは困難を乗り越えて、民主主義を守り発展させてきたという誇りだ。だから今回の事は無念で無念でならない。私は原発が自然や人を破壊するこわさと、代替エネルギーや原発に頼らない地域の経済や生活について、人に話していると思う。(栗原明子)

「核は現代の死神」

横浜に船員暦も活動家暦も私より先輩筋あたる堀江康という仲間がいた。彼は理論的にも大変すぐれてい

て私はいろいろ教えてもらうことが多かった。その彼が病を得て死んでしまう最後の頃の年賀状だったと思う。「核は現代の死神」と墨書したのがあってその内容を巡り何回かの手紙によるやり取りをした。

彼の見解は、畢竟「核は現代において生産力たり得ない、破壊力以外ではない。原爆は勿論、原子力船もそうだが原子力発電の平和利用などは幻想に過ぎない」というものだった。私はもっともらしい技術論でいくらかの反論乃至は問題提起を試みたつもりだったが、結果は始めからも判っていた様なものだった。

私はいま福島原発事故以来の巷間の論議を思うにつけ、この堀江兄との「核は現代の死神」論議を時々思い起こしている。そしてこの「原発事故」をもっと思想的に考察し、日本と世界の新しい進路を構想する議論をする契機にしてもらいたい、そうするに値する問題ではないかと思ったりしている。(小林三郎)



原発からの脱却を痛感

今回の野口先生の講演は、放射線の恐ろしさは理解しつつも、その正しい知識の必要性もまた理解する必要があることが分かった点で、大変勉強になりました。

すでに大量に放出された放射線にたいして、どのように対処すればよいのかを自分で知識を身につけ、自分で対処する以外になくな

たと感じます。こんな状況に追い込まれてしまったことに、新たな怒りを覚えます。

今回の事故で、福島第一原発が営業運転を開始し、全国的にも原発が順次稼働されていった当時、37年前に原子力船「むつ」もまた、漁民や多くの反対を押し切って出力試験に出航しました。そして試験中に放射線漏れを起こし、受け入れ先がなくなった「むつ」が帰るあてのない漂流に追い込まれる事態に陥りました。この事故に全日本海員組合は毅然として立ち上がり、この事故の根源にある構造的欠陥を鋭く追及し、世論に訴え、広く国民の共感を得た闘いのあったことを思い出しました。(船員OB)



「野菜を念入りに洗う」

これまでだっていい加減にしてきたつもりはないけれど、震災以後はなおさらだ。市場に出回る食品は暫定基準を下回っているはずと、頭ではわかっているが、やっぱり少しでも体内に取り込む放射能を減らしたいと思う。

野口先生の講演で、放射能とは今後数十年にわたって向き合わなければならないとの感を強くした。さまざまな理由をつけて原子力行政を推進してきた勢力や東電への怒りを胸に刻みつつ、せめて冷静な観点で私にできることを日々積み重ねていこうと思う。(N子)